

# “偉大なるポワロ”を演じた、偉大な俳優たち

## 熊倉 一雄 くまくら かずお

2015年10月12日、熊倉 一雄氏が逝去された。1990年放送開始の第1話から『名探偵ポワロ』の主人公エルキュール・ポワロを演じるデビッド・スーシェの日本語吹替を担当、ラストとなる最終話の収録を録り終えた、約1年後のことであった。

1927年1月30日生まれ、東京麻布の出身。劇団感覚座、東京演技アカデミー、劇団東芸、日本テレビを経て1956年、テアトル・エコーに参加。以降、ここを拠点に俳優、演出家として活動を続ける。『日本人のへそ』など井上 ひさし氏とのコンビでも知られた舞台活動と共に、日本では1957年から放送が始まった『ヒッチコック劇場』のアルフレッド・ヒッチコック監督を初めとする、数々の吹替で活躍。テレビ人形劇『ひょっこりひょうたん島』の海賊トラヒゲ役が特に有名だが、1960～1970年代を過ごしたファンには子供向け教養番組『ものしり博士』のホスト人形であるケペル先生、SFアニメーション『スーパージェット』の西郷長官、米アニメーション『ポパイ』のブルート、米TVドラマ『宇宙家族ロビンソン』のドクター・スミス、洋画『猿の惑星』のザイアス博士等のキャラクターを懐かしむ方も多いただろう。また1980年代、吹替ではなく顔を見せて出演していた教育番組『ばくさんのかばん』のばくさん役も子供たちに親しまれた。

そんな彼が約25年にわたって演じ続けたライフワークとも言うべき代表的な役が、『名探偵ポワロ』のエルキュール・ポワロである。元々、ポワロの大ファンであった熊倉氏は、オファーを受ける以前から原作を読破していたようだ。そして大半の原作ファンと同じく、小説から抜け出してきたようなイメージのスーシェ＝ポワロに感銘し、スーシェのポワロを吹き替えたことは最高で、生き甲斐だったとさえ述べている。

このTVシリーズの成功の原動力はスーシェであると共に、熊倉氏の偉業でもある。少なくとも本邦の『名探偵ポワロ』は、スーシェの表象と熊倉氏の声の演技による主演によって導かれて来たものだ。親日家で訪日の経験もあるスーシェは、熊倉氏の吹替に対し、最もポワロに合っている声だと評したと云う。これはとても意味深い評価だと思う。

私見になるが、スーシェによるポワロの演技は熊倉氏と比較すれば若干、左脳的な“理”にポイントがあり、逆に熊倉氏の演技はスーシェと比較すれば右脳的な“情”に幾分、比重が置かれているように思える。ひらたく言えば熊倉＝ポワロの真骨頂は正しく我等の愛するあのチャーミングなユーモアであり、そのセンスとポワロというキャラクターのマッチングを、当のスーシェが認めたということではないだろうか。その源泉はひとえに、喜劇俳優としての熊倉氏の資質に由来するものだと思う。熊倉氏の産むユーモアは、“何がどうでも笑えればいい”という結果論的に野放図なものとは正逆の、人間の持つ生来の本能や特性から自然発生的に起きるナチュラルな可笑しさだ。一切のやましさや気負うことなく晴れ晴れと思いきり笑えるそれは先に挙げた数多のキャラクターが示す通りで、奔放な野生児トラヒゲや毒のあるヒッチコックさえ、例外ではない。極端な規則性と懇懇さに執心するポワロをチャーミングに表現する熊倉氏のユーモアに、スーシェはもしかすると自分を上回るプラスαを見出したのかもしれない。スーシェのみならず、良質な喜劇人である熊倉氏を得たことは、『名探偵ポワロ』にとって最高に幸運だったことに違いない。

そして、熊倉氏のもうひとつの偉業はスーシェに等しく、最終話まで演じ通したことだ。熊倉氏においても、人生の約1/4にあたる時期を共に生きたポワロは、再演のある舞台の仕事を除き、最も長く付き合った役なのではないだろうか。トラさんの活躍する『ひょっこりひょうたん島』は1969年放送開始で最新作は2003年だが、初期シリーズと新シリーズの間が22年空いているので、これは別と考えていいだろう。

間欠的な放送ながらもリアルタイムに演じ続け、役と共に齢をとり、ファンとその時代を共有したシリーズの栄えある最終話『カーテン ～ポワロ最後の事件～』で、これまで描かれて来た日々を振り返る感動的なポワロを演じ切り、無事、『名探偵ポワロ』の世界を完結させた熊倉氏は、最後を見送ってほっとしていると述べた。日本の大半のファンにとって主人公は紛れもなく、スーシェ&熊倉＝ポワロだった。この偉大なる探偵は、偉大なる二人の俳優によって創り上げられた存在なのだ。

熊倉 一雄氏の偉業に賞賛を捧げると共に、その御冥福を深くお祈り申し上げます。